

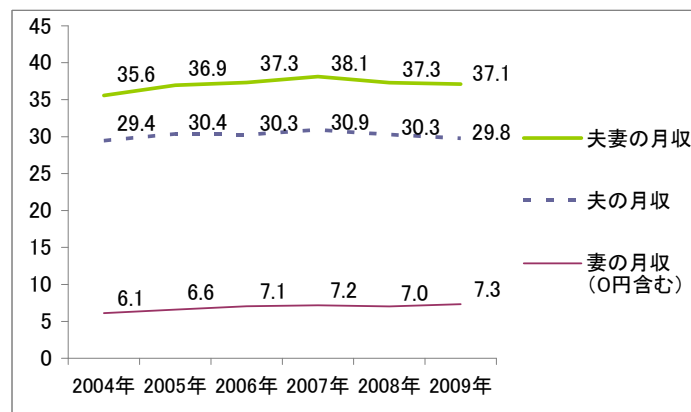
I. 夫の収入の変化と家計の対応

(1) 夫の収入が減っても妻の労働時間は増えない

2008年秋のリーマンショック以降、世帯主の平均手取り収入は2年連続減少している(図表I-1)。このような中で、世帯はどのような対応をしているのだろうか。

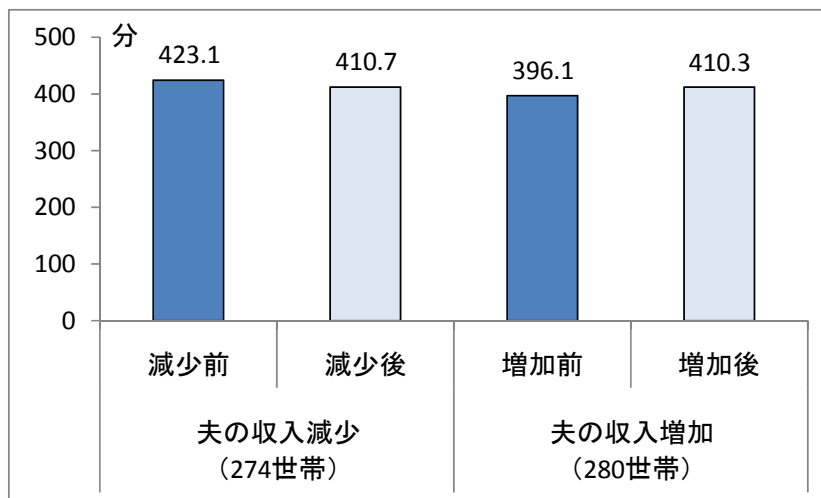
夫が離職したり、夫の収入が減少した場合、妻が家計を支えるべく、新規に就業し始めたり、労働時間を延ばす傾向があるといわれている(ダグラス・有沢の法則)。では実際に、妻の新規就業は進み、労働時間は伸びたのだろうか。

図表 I-1 手取り月収の推移(9月分、実質化済み)



まず、妻の就業状態・労働時間の変化について、2007～2009年のデータをもとにし、夫の手取り収入が減少した世帯(前年比5%以上減少)と、増加した世帯(前年比5%以上増加)の間で比較した。妻の新規就業率は、前者では14.4%(187世帯中27世帯)、後者では13.7%(183世帯中25世帯)であり、大きな差は見られなかった。働いている妻の労働時間は、どちらのタイプの世帯でも10数分の増減にとどまっており、やはり大きな差は見られなかった(図表I-2)。

図表 I-2 妻の労働時間(平日、1日あたり、働いている妻のみ)



(2)子どものための支出は最優先、妻と夫はガマン

それでは、世帯主の平均収入が減少する中で、世帯の中のお金の使い方はどう変化しているのか。ここでは、2009年までの3年分のデータをもとに、夫の収入が減った世帯と増えた世帯で、誰のためにお金を使っているかを調べた。

【金額の変化】 まず、支出金額をみると、夫の収入が減少した世帯では、ほとんどの項目が減少しているのに、子どものための支出のみが微増している（図表 I-3）。一方、夫の収入が増えた世帯では、妻のための支出以外はすべて増加しており、特に子どものための支出が増加している。

図表 I-3 世帯内支出額の変化

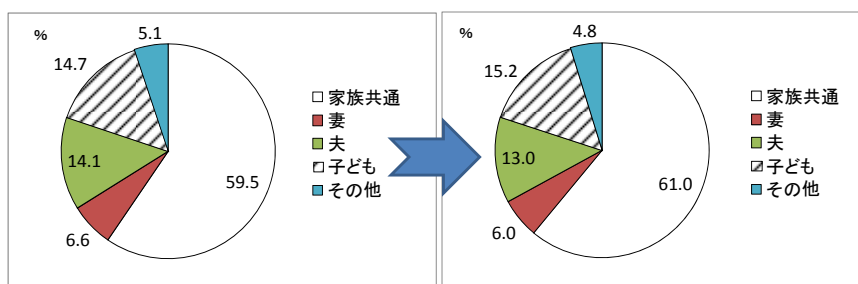
単位：千円

	夫の収入が減った世帯 (496世帯)		夫の収入が増えた世帯 (493世帯)	
	減少前	減少後	増加前	増加後
全体支出	258.9	247.9	249.4	259.5
家族共通のため	152.0	147.2	148.2	151.0
妻のため	18.3	15.7	17.2	16.1
夫のため	36.1	31.6	33.7	35.6
子どものため	39.6	40.8	37.0	44.2
その他のため	13.4	13.2	12.7	13.5

【支出割合の変化】 支出割合の変化をみると、夫の収入が減少した世帯では、夫、妻、その他の世帯員分は減少するものの、家族共通、子ども分が微増していた（図表 I-4 上）。収入が減少しても、家族共通、子どものための支出は減らしていないことがわかる。一方、夫の収入が増えた世帯では、特に子どものための支出の割合の増加幅が大きい（図表 I-4 下）。以上から、夫の収入が減少した場合、妻の新規就業や労働時間の増加による対応でなく、家族の成員ごとの支出の見直しによる対応をしていることがわかった。

図表 I-4 世帯内支出割合の変化

【夫の収入が減った世帯（496世帯）】



【夫の収入が増えた世帯（493世帯）】

